

創作実験劇場 不思議な文字と7つのダンス

3月12日(土) 17:30開演 神戸ファッション美術館オルビスホール

出演 吉川ひかる 高橋陽奈 中野茉歩 村上美羽 菊原麻衣花 稲益夢子 田中文菜 平岡愛理 梁河茜
板垣祐三子 石井麻子 向井華奈子 かじのり子 菊本千永 金沢景子
書提供 和田彩

創作実験劇場は毎年テーマを一つ決めて、そのテーマを元に作品を創ってきましたが、今回は一つのテーマを決めず文字を一点えらび、その文字をテーマに作品を創りました。

2020年に書家の和田彩先生が古典の文字を臨書(手本にして書くこと)し、個展を開催されました。そのとき出展された作品の中から、作舞者それぞれが気に入った一文字を選び、その臨書された文字をテーマに作舞しています。選んだ文字は「雨」「観」「空」「海」「鳥」「贈」「遊」。書体も様々です。読めない字、今テストでこの字を書けば×をつけられる字、様々な文字に興味は尽きません。長い歴史を経て、現代に再現した字を背景に踊れることを今から楽しみにしています。どうぞ来場下さい。

※本通信には、和田彩先生の原字は掲載していません。

※字の解説は 和田彩著『文字の魅力を探るI』より。

「雨」 甲骨文字。甲骨文字は殷王朝の遺物で、占トに使われたもの。雨が空からやってくる様子を表したものの。

雨

- ・凍てついた悲しみ
 - ・雨は天からやってくる
 - ・花はほんの少しの土でも咲こうとしている
- いま命があるのなら、かならず生きてください。

藤田佳代

「観」 十七帖より。十七帖とは、王羲之(303~361)の手紙29通を集めて刻したもの。冒頭の二文字をとって十七帖と言う。

観えるもの 観えざるもの

目を開けてものを見るとき、わたしたちは「見ている自分」(内側)と「見られているもの」(外側)は分離して存在すると考えています。

「外側にあると思いついでいる世界は内側で起きている現象である。ほんとうは世の中や他人なんて存在してなくて、すべては自分の心の投影。そして自分の心もすべては実体のない変化している状態のものだ。」という言葉に出会った時、目からウロコが落ちました。 金沢景子

「空」 風信帖より。空海(774~835)が最澄に宛てた手紙の中の文字。空海40歳ころの書。

空・めぐる

いつも見上げればある空。

真っ暗な夜から、朝、昼、夕方、時には雨が降ることも。そして再び新しい夜へ。どんな1日でも今日という空の流れは止まることなく明日に向かっている。何気ないこの空にそれぞれの想いを乗せ踊ります。 自灯明

「海」 光明皇后臨樂毅論より。光明皇后(701~760)が王羲之の樂毅論を臨書したもの。

海をゆく

和田彩先生の臨書光明皇后臨樂毅論の中の海の一文字より作舞しました。この一文字、大変、力強い楷書です。

今回踊る「海をゆく」ですが、平岡愛理さん、田中文菜さんとのトリオの作品です。

3人は宗像三女神をイメージしています。宗像三女神は『古事記』でアマテラスとスサノオの契約で生まれた3人の女神で、北海道中を守る神です。現在も各地で航海、交通の安全を祈願し、『道』の神様として祀られています。コロナ禍で私たちは進むべき道、未来がわからないところにいます。私の中で今おかれた環境が深い海の暗闇と重なって、この踊りができたように思います。

力強い海の一文字は時に荒々しく、広く深い海のように。海をゆく、3人の女神に導かれ未来へ進みたいと想いをのせて。

向井華奈子

「鳥」 孔子廟堂碑より。虞世南の書。630年長安の孔子廟が再建されたことを記念に、唐の太宗の勅命によって書した碑の中から。

鳥一渡りのとき

和田先生が書かれた鳥。横線が1本多い堂々とした書体から、なぜか、昆陽池にいる渡らない白鳥が頭に浮かびました。

「白鳥だけどずっといるよな。なんで？」飼われているから羽を切られているのかと思いきや、餌付けをすると渡らなくなる様です。飼われていなくても、怪我などがなくても、渡らない選択をする鳥も何%かは、いるらしい。

渡る鳥と渡らない鳥、それぞれが自分の生きる場所を自分で選んで、そこでしっかり生きている。そんな思いを瑞々しい若手3人に託します。

寺井美津子

「贈」 祭姪文稿より。祭姪文稿とは758年に書かれた顔真卿の書。殺された甥（姪）の顔季明の霊に捧げたもの。

贈りもの—今日

贈。和田先生が臨書されたこの字は、著作の『文字の魅力を探るⅠ』によると、殺された甥の「首を前にして、悲憤こみあがり激情がほとぼしっ」て書かれた文の中の字だという。この「贈」という字は人の死と同等の重みを持った文字なのだ。贈、贈る、贈りもの。これらの言葉から連想される、なにかきらきらしたもの、ではない。それなら私も、せめてはその重みを心得なければ。タイトルは贈りものに決めた。

贈りもの—それはわたしの「今日」。わたしが受け取る今日という贈りもの。今日一日を生きること。

菊本千永

「遊」 石鼓文より。石鼓文とは、大きな鼓状の石に刻まれた詩句のことで最古の石刻文字。原本の文字は旗が風になびく象形と子どもが元気に外で遊んでいる姿が組み合わさったもの。

遊ぶ

・ブロック ・ねんど ・スライム

和田先生の書から一字いただき、創作いたします。子供の頃から現在に至るまで、物がしょっちゅうなくなります。もしかしたら目に見えないところで何ものかが存在し、隠して遊んでいるのかもしれない。見えない世界で何かが遊ぶ、を踊りにしました。

かじのり子

ありがとうございました。終了しました。

和田彩先生講演会 書芸術の魅力—文字から出発し、文字を超える— 2月27日（日） 神戸ファッション美術館オルビスホール
文字をながめているだけで本当に楽しくて、せっかく文字をテーマに作舞したのだから、もっと文字のことを学んでみたいとの思いで和田先生に依頼し、2月27日（日）オルビスホールにて、講演をしていただきました。

タイトルは 書芸術の魅力—文字から出発し、文字を超える—。文字の変遷や、今回の背景となる文字たちの説明を受けたり、珍しい動物の毛（例えばマングース！）を使った筆をさわったり、最近の和田先生のパフォーマンスについて、たとえば即興ジャズをバックに古代文字を書く、大きな黒板に白龍を降り立たせたチョークパフォーマンス、砂文字、風と戯れて書いた30メートルの巨大文字・・・の動画を見たり。興味の尽きない講演でした。聴講した高校生が興味津々に質問していました。

第1回 自灯明モダンダンスステージ

2021年11月3日（水・祝）神戸ファッション美術館オルビスホール

出演 安岡珠希 住谷路 岡田珠季 吉川ひかる 高橋陽奈 中野茉歩 北川武胡 坂本のより 村上美羽 佐藤茉莉 石井麻子 板垣祐三子
向井華奈子 かじのり子 菊本千永 金沢景子 菊原麻衣花 稲益夢子 田中文菜 平岡愛理 梁河茜 東伸一矩（特別出演）

第1回自灯明モダンダンスステージを観に来て下さりありがとうございました。

初めて主として公演をさせて頂いて、改めて沢山の方々の助けがあって成り立っていることに気付かされました。

会場全体が皆様のパワーで包まれたように感じ、観に来て下さった皆様からは「元気をもらえた」「感動した」など嬉しい言葉をたくさん頂きました。

改めて踊り続けられる場所、仲間、身体があることに感謝・喜びを感じ、これからも自分を見失うことなく、心の灯を絶やさずに生きていかなければと強く思います。

諸先生方をはじめ、皆様のお力添えがあったからこそ、こんなにも素敵な公演になりました。至らない点多々あったと思いますが、未熟な私たちを温かく見守り支えてくださりありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願い致します。

自灯明

舞台評

藤田佳代舞踊研究所の若手ダンサー5人が結成した《自灯明》の旗揚げ公演が開催された。《自灯明》の作舞による『灯（あかし）』は彼女達の力強いメッセージが込められた作品だった。座っていた椅子の間をさまよい歩く様は人生を模索する姿が表現され、真っ暗な中、灯りを求めるように片手を上げて踊る姿に自分を重ねて見た。次に椅子から離れ開放感に満ちた場面からは『羽ばたけるのだ』という意志が伝わってくる。何かに頼ることは逆に縛られること。一步を踏み出し、自由に生きることの素晴らしさが、輝くようなステージから伝わってきた。

藤田佳代の作舞で『拡がる』より「一夜にて 火の手のあがる 彼岸花」は、6名のダンサーが丸い円を作り、腰をかがめたり、一斉に身体を反らせたりする。両手をひらひらさせて天井を仰ぐ様は、命の宿った一輪の花に見えて愛らしい。これから秋に彼岸花を見る度に、私はこの踊りを思い出すだろう。藤田の作品には、生きとし生けるものを愛でる視線が込められ、普段は気付かない日常の風景を優しく色づけてくれる。その精神を受け継ぐ《自灯明》の今後の作品も期待したい。

金子真由 関西音楽新聞 (Classic Note) 2021年12月1日号